St. Luke's International University Repository

2001年度マギル大学夏期語学研修報告:学術活動報告(2001年度)

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2007-12-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 園城寺, 康子, 深谷, 計子
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/423

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

2001年度マギル大学夏期語学研修報告

今年度のマギル大学語学研修は前期試験との関係で例年より遅れて８月３日から27日の３週間にわたり行われた。１年生１名，２年生４名，計５名が参加して，無事終了した。今年度は前期試験終了後少し余裕があり，航空券も早期にまとめて手配したので，問題なく進行した。プログラムは例年通り，午前中の語学研修と午後から夜にかけてのカルチャー・プログラムが組まれおり，子供病院見学やトロントやナイヤガラ・フォールの観光などもあり，全員週末にはホームステイを経験した。また，そのうち１名はオプショナル・ツアーで，アンの物語の舞台であるプリンス・エドワード島に出かけた。

英語クラスは本学の５名に他大学の数名が加わり構成されたが，優れた講師に遭遇し，意欲的に授業にとりくみ，全員満足度が非常に高かった。語学力の変化に関しても，話さざるを得ない環境におかれたため語彙不足を認識し，コミュニケーションのとり方に関心を深めた学生が多かった。また，研修前後のリスニング・テストの結果では，昨年度より伸び率は高かった。

例年と異なる点としては，今年度は，モニター個人に対する不満が見られた。今までは非常に好評だったのに，本年度のモニターが気まぐれでスケジュール伝達などルーズ点があり，モニター長が補う結果になったようである。来年度に向けてマギル大学にモニター選出に関して改善を申し入れるつもりである。しかし，「研修を終えて思い返すと，英語で困った状況をいかに打開するかという経験から学んだことも多かった」とのリーダ役の学生からの報告もあった。危険な状況ではなかったようなので，それはある意味で，この研修での貴重な体験だったのかもしれない。

次に，特に午後の文化スケジュールの過密さを指摘する意見が今年は例年より多かった。例年，カナダでの生活に慣れるにつれて自分のペースを回復していたようだったが，モニターとの関係もあり過密すぎたのかもしれないので調整してみたい。

総括的にみて，今年の学生はたくましく，混合クラスも他校の仲間との新しい交流が生まれるチャンスととらえ，自分たちで出発・帰国旅程を組み手配することに喜びを感じてくれ，忙しいが様々な異文化体験を楽しんだようである。

（英語担当：園城寺康子，深谷計子）